

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月3日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 35】

安全・安心の職場づくりへJRからの革マル排除が不可欠だ！

「綾瀬アジト解析資料」の「反党活動を行った『トラジャ』メンバー」とは、間違いなく「松崎明秘録」にある動労第4代青年部長の上野孝氏のことだ(No.25、26)。同氏は1994年に革マル派に拉致され、査問のため2年半も監禁されて、最終的にオーストラリアに逃亡し死亡したそうだ。松崎氏の著書で「綾瀬アジト解析資料」の記述の真実性が証明されたことになる。坂入氏の場合も、JR総連の革マル派メンバーが暴力的査問の事実を知っていたからこそ、救出に必死だったと考えれば辻褄が合う。両氏とも革マルの大物党员だからこそ拉致、監禁されたのであり、彼らが革マル派と無縁ならこのような事件など起こり得ないはず。これらの事件は、JR総連の中核への革マル派の浸透を明確に語っている。

前号で、革マル派の暴力的な集団による糾弾は、浦和電車区事件や三鷹電車区事件と酷似していると指摘した。読者の皆様には、JR連合組合員を通じ、事件の真実を描いたマンガ「奪われたハンドル」やDVD「JR三鷹電車区事件の真実」をぜひご覧いただきたい。JR総連・東労組のいじめを受けた組合員は他にも多数いる。革マル派がJR総連・東労組に深く浸透し、その行動様式が職場で反映されていることは明白だ。安全で安心して働ける職場を築くために、JRから革マル派を徹底して排除しなければならない！

「T氏糾弾事件」は第二の「浦和電車区事件」に発展するか？！

ところで、2002年以降「東労組を良くする会」の動きを巡り、東労組内で激しい内部対立が起こったことは記憶に新しい。その象徴ともいえる、2003年5月に発生した「T氏糾弾事件」について紹介しておきたい。この事件は、2003年5月10～13日に埼玉県城峯高原キャンプ場で行われた東労組運輸車両部会の常任委員会で、長野地本代表で出席したTさんが、東労組本部大会の代議員選挙に立候補したことが問題視され、4日間にわたる会議の中で繰り返し激しく集団的追及を受けて、強度のストレスにより「抑鬱神経症」になり70日間も入院する事態になったというもの。当時の信濃毎日新聞に掲載されたほか、長野地本の声明、見解、要請書などに事件の経過が記載されている。現場での脅迫の内容は、宗形明著「続 もうひとつの『未完の国鉄改革』」(p.137)に以下の通り紹介されている。

T氏「迷惑をかけて申し訳なかった」本部派役員「組織を混乱させたんだろう」「組織を混乱させることが目的だったんだろう」「寝れると思うなよ。しゃべるまで寝かせねーからな」T氏「明日は仕事なんだけど」本部派役員「4日間黙ってれば帰れると思うなよ」「なめてんのかー(水の入ったヤカンを持ってきて頭からかけようとした)」「帰れると思うなよ。おれが明日の朝、風邪で休むと職場に電話をかければいいんだからな」「十分時間をやるからしゃべってくれ。後2分だ。もう待てねーよ。早くしゃべれ。首締めたるか。しゃべらねーと殺すぞ」「人に言われれば何でもやるのか。死ぬと言われれば死ぬのか」「組織破壊者として認めたら12地本に謝罪行脚に行け」

T氏は2006年9月に脅迫を行った役員21名を告訴したが、東労組機関紙「緑の風」(475号)や「JR総連通信」(921号)によると、2009年1月、18名に長野県警から呼び出しがあったようだ。東労組は加害者側21名を「F21」と称し、新たな弾圧と闘うとしている。

「T氏糾弾事件」は第二の「浦和電車区事件」に発展するか、非常に興味深いところだ。

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月5日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 36】

JR総連は坂入事件の真相を説明せよ！

前号、前々号では、革マル派とJR総連の集団追及の手法が酷似していることを検証したが、坂入氏の拉致・監禁事件に話を戻したい。

JR総連は警察に告発状を提出し(No.31)、何度も記者会見を行った。また、傘下組合では、坂入氏を救出しようと、全国の駅頭などで組合員を動員して「尋ね人」「坂入さん救出にご協力を」なるビラを配ったりした。さらに2001年2月に埼玉県議会に救出の協力を要請する「陳情書」を提出し、県会議員が質問したほか、3月には衆議院内閣委員会で民主党の中沢健次議員(北海道比例)が質問し、警察庁長官に万全な捜査を要請した。このほか、JR総連は連合執行委員会で各産別に救出への協力を要請する発言もしている。

坂入氏争奪戦は、組合員や国会、地方議会も巻き込んでエスカレートしたが、外部の方々にはもちろん、JR総連の一般組合員にもわけのわからない騒ぎであったことだろう。

あまりにも無責任極まる「坂入事件」の幕引き！

ところで、JR総連が大騒ぎした「坂入事件」は、2001年8月9日、彼らが警察への告発を取り下げた後、2002年4月13日に本人が自宅に戻ったことで突然終了した。4月14日に坂入氏の妻からJR総連に連絡があり、15日に記者クラブにファックスで報告したらしい。5月15日に埼玉県警が記者会見を行ったが、あれだけ騒いだJR総連は、一転して、何の説明もしていない。当時、埼玉新聞に以下の記事が掲載された。

吉川の不明男性が帰宅 JR総連が発表

JR総連の元会員の男性(62)が2000年11月から行方不明になっている事件で、JR総連は15日、男性が吉川市内の自宅に帰宅したと、男性の妻から連絡があったと発表した。JR総連によると、男性は13日夕方ごろに自宅に戻り、男性の妻が14日午前にJR総連に連絡してきたという。妻は「心身ともに衰弱していて静養させたい」と話しており、JR総連は男性の回復を待つて事情を聴くとしている。-(後略)-【2002年4月16日 朝刊】

帰宅男性から聴取 JR総連元会員失踪

JR総連の元会員の男性(62)＝吉川市＝が2000年11月から行方不明になっていた事件で、県警警備部は16日までに、先月13日に帰宅した男性から事情を聴いた。男性は「自分の意思で行動した。刑事告発は自分が頼んだことではない」と話したという。-(中略)- JR総連は男性の衰弱が激しいとして、事情を聴いていないという。男性の発言について、JR総連は「初めて聞いた。事情は分からない」と話している。【2002年5月17日 朝刊】

JR総連は「男性の回復を待つて事情を聴く」と言ったそうだが、今日もなお、まったく説明もなく、彼らは事件に一切触れていない。これだけ世間を振り回しておきながら、無責任極まる対応には開いた口が塞がらない。「事件の原因は何か」「坂入氏は監禁中何をされたのか」「革マル派古参党員でJR労研中央事務局長なる坂入氏とはいかなる人物なのか」「九州労大量脱退事件は坂入氏らが指導したのか」など、JR総連が組合員のみならず社会に説明すべきことは山ほどある。坂入氏は組合員の前に出て、自ら真相を説明する義務がある。都合が悪くなると黙り込むJR総連。革マル派との関係は真っ黒だ！

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月10日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 37】

申し出がないから「革マルはいない」とするJR総連・東労組

革マル派とJR総連、つまり党中央とJR革マル派とが対立を深め、「坂入事件」が発生した頃、東労組は2000年12月、2001年1月、それぞれ見解を明らかにした。前者の「度重なる革マル派からの組織破壊攻撃をうち砕くための見解」には、次の記述がある。

「進撃」(注:革マル派ビラ)4号の1面末尾に「わが黨員でもある組合員たちは、今こそ今回(九州労問題)の苦い教訓をかみしめて明日のJR労働運動の戦闘的展開の先頭に起とうではないか」と書かれている。-(中略)-JR東労組内においては、革マル派黨員はいないとは思いますが、もし存在し、革マル派の呼びかけに応じて「先頭に起つ」のであれば、ぜひ分会長に申し出てほしい。

そして、後者の「労働組合主義に徹し、あらゆる攻撃をうち砕こう！」には、次のように書かれている。

わが組織内にもしも革マル派黨員が存在し、革マル派の呼びかけに応え「JR労働運動の戦闘的展開の先頭に起つ」人がいたら分会長に申し出よと呼びかけた。案の定ただの一人もいなかった。革マル派よ、わがJR東労組内には、革マル派黨員も、呼びかけに応じて「先頭に起つ」ものもただの一人もいない、ということである。

東労組はこのように、分会長に申し出る者がいなかったから「革マル派はただの一人もいない」と断言しているが、これで納得する組合員こそ、組合役員を除き「ただの一人もいない」だろう。それでも東労組執行部らは、未だにその主張を繰り返している。

東労組委員長(当時書記長)は革マルかどうか調べ方は「ないと思う」と証言！

また、東労組品川車掌区分会の役員が、組合掲示板から当時の東日本鉄産労(JR連合、現JR東日本ユニオン)のビラをはぎ取り、丸めて投げ付けた事件の民事裁判(2000年10月3日)で、被告側証人として東労組千葉勝也書記長(現委員長)は以下の通り証言し、誰が革マル派か「調べ方があるか」との問いに「ないと思います」と答えている。

(原告側代理人)(注:1999年1月公安調査庁「内外情勢の回顧と展望」)18ページの真ん中辺りに、「労働運動の分野では、最大の牙城といわれるJR東労組において、今夏(注:1998年)開催の同労組中央本部・地本定期大会で、同派系労働者多数が組合執行部役員に就任するなど、同労組への浸透が一段と進んでいることを印象付けた」というふうを書いてあるわけですから、あなたが事実無根と言われた場合に、そのうちのどの部分を事実無根だとおっしゃっておられるんですか。(千葉)これは、革マル派が東労組の執行部に就任しているという意味ですよ。(代理人)そういうふうに読めますね。(千葉)そのようには私どもは読めませんというということです。(代理人)それは事実ではないというふうにおっしゃるわけですね。(千葉)はい、そういうことです。(代理人)ところで革マル派という組織は、誰が革マル派のメンバーか公表しておりますか。(千葉)分かりません。-(中略)-(代理人)ある人が革マル派のメンバーかどうかということは、東労組としては知りようがない事実じゃないですか。(千葉)知りません。(代理人)知りようがない事実、つまり調べても分からない事実ではないかという趣旨です。調べ方がありますか。(千葉)ないと思います。

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月12日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 38】

調べもせず「東労組に革マルはいない」となぜ断言できるのか！

前号の通り「革マル派は一人もいない」と豪語する東労組だが、千葉委員長（当時書記長）は2000年10月3日の証人尋問で、誰が革マル派かどうかは調べようがないと思う、と述べた。さらに証言内容を検証していきたい。

(原告側代理人)そうすると、あなた方は(注:公調資料を)事実無根と言うけれども、事実無根かどうかさえ分からない、(注:東労組内部に革マル派がいるのかも知れないし、いないかも知れないということと違うんでしょうか。(千葉)そういう仮定の論議はちょっとできないですね。(代理人)-(中略)一分かるんですかという質問をしているんですよ。(千葉)誰々が革マル派かということですか。そんなことは分かりません。(代理人)東労組でも分からないわけですよね。(千葉)分かりません。(代理人)あなたは事実無根だと言われたけれども、事実無根かどうか分からないというのが正確な答えじゃありませんか。(千葉)そのようなことはないと思います。そもそもここ(注:公調資料)に書かれていることは事実無根だということです。(代理人)甲11号証(注:公調資料)の18ページの「今夏開催の」というのは、これは1999年1月の文書ですから、1998年のことを言っているんだと思うんですが、文章の読み方としてはそれでよろしいのでしょうか。(千葉)そうですね。(代理人)「中央本部・地本定期大会で、同派系労働者多数が組合執行部役員に就任」という事実は、あなたは違うとおっしゃるけど、どうやって調べましたか。(千葉)私たちは労働組合なんですよね。それで、労働組合としての信任を得て、規約、規則にのっとって、それで役員は決まるわけですね。その方たちが革マル派系ということは、ここにいろいろ書いてますけれども、私たちはそのような事実はないというふうに認識しているということです。(代理人)私の質問は、調べたかという質問なんです。(千葉)調べません。(代理人)例えばあなたは革マルかとか、そういうことをお聞きになったことはないわけですね。(千葉)そういうことはやりません。(代理人)聞いても答えない事項だというふうにはお考えになるでしょう。(千葉)いや、それは分かりませんけれども、必要のないことだと思います。(注:公調資料)は99年1月公安調査庁「内外情勢の回顧と展望」

JR総連・東労組は政府側見解を否定する前に疑惑を説明せよ！

千葉氏は、東労組として誰が革マル派かは分からないし、調べてもいないと証言した。そのくせ、数ヶ月後の東労組見解では、革マル派党員は分会長に申し出るよう呼び掛けたが申し出がなかったので、革マル派は「ただの一人もいない」と豪語している。調べようもないのに、なぜ断言できるのか。千葉氏は、上述の裁判で、さらに次のように証言した。

(代理人)公安調査庁というものがやっている限り、初めから何の信憑性もないと、一切そのことに耳を傾ける必要はないんだというお考えですか。(千葉)はい、そう思っております。

千葉氏をはじめJR総連・東労組の役員らは、革マル派が相当浸透していると再三指摘する公安調査庁、警察庁、政府の見解(No.1、No.3参照)は、「権力側の発表だから」という理由で「事実ではない」と決め付けている。「浦和電車区事件」の対応に象徴されるように、彼らは都合の悪いことは何でも「権力の弾圧」として否定するが、そのような言い訳は組合員や社会に通用しない。「革マル派はいない」というなら、「坂入事件」「九州労事件」「トラジャ」「マングローブ」「JR労研」等々、疑惑の真相を説明するのが先決だ！

「検証:JR革マル浸透と組織私物化の実態!」はJR連合ホームページに掲載中! <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月17日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 39】

革マル浸透の政府答弁に「いないからいない」と開き直る松崎氏！

「革マル派は一人もいない」「警察発表は信用しない」とのJR総連・東労組の“公式見解”に関し、最後に、東労組元会長の松崎明氏が2009年1月26日に「週刊現代裁判」で証言した内容を紹介したい。

(被告側代理人)革マル派に残っている人がいないということはどうして分かるんですか。(松崎) いや、革マル派というのは極端な主張をしますからすぐ分かりますよ。(代理人)分かるの。(松崎)すぐ分かりますよ。(代理人)と、もうそういう人(注:革マル派)はいなくなったということですか。(松崎)そうです。(代理人)JR総連にもJR東労組にもいない。(松崎)全国は知りませんが、私の知る範囲においてはありません。(代理人)いつぐらいまでいたんですか。(松崎)私(注:革マルを)やめてますから、誰がいつ頃どうしているかなんてことは承知しておりません。-(中略)-(代理人)もういないというようなご発言されたから、じゃあいつ頃までいたんですかと。ごく当たり前の会話ですよ。(松崎)もうと聞かれた時期ですよ。(代理人)要するに、お分かりにならない、あんまり。(松崎)だからそこ(注:「松崎明秘録」)に書いてある時期ですよ、もうというのは。(代理人)私が聞いているのは、JR東労組の中に革マル派の活動家がいたというのを認識した一番新しい時期というのはいつ頃ですかと、そういう質問ですよ。(松崎)……(代理人)何年ぐらいまではいたねと。(松崎)…だから何年ぐらいまでいたか私は知りません。(代理人)どうして知らない。見ても分からないから。(松崎)だから、特別な発言等があれば分かります。それ以外は分かりません。

「警察の発表だから信用していない」との根拠では組合員は納得しない！

松崎氏の「革マル派はいない」との結論ありきの証言は、支離滅裂である。さらに、政府の革マル浸透に関する見解について、松崎氏は次のように証言した。

(代理人)政府は2006年5月12日付けの国会議員からの質問に対する答弁書、丙23号証(注:No.1参照)の中で、JR総連及びJR東労組内において、「影響力を行使し得る立場に革マル派活動家が相当浸透していると見られるところである」と、こういう答弁をしています。こういう答弁があること自体はご存知だと思いますけれども、まずこの答弁の内容については、誤りだと認識しているということでしょうか。(松崎)事実関係は全く間違っていると思います。(代理人)総連はともかくJR東労組の中に、影響力を行使し得る立場に革マル派活動家が相当浸透しているということは、2006年現在ではないということですか。(松崎)警察の発表ですから、そのようなことは信用していません。(代理人)警察発表じゃなくて、政府が閣議に掛けて答えている答弁書ですけれども、いずれにしてもとにかくこれは間違いだということですか。(松崎)そうです。(代理人)信用していないという考え方の問題なんですか、それとも事実としていないということですか。(松崎)それは事実としていないんですから、いない者を、という者を信用するわけにはいかないでしょう。(代理人)どうしていないということが分かるんですか。(松崎)いないからいないんですよ。

「革マル派はいない」との根拠は「警察の発表だから間違いだ」ということか。警察は革マル派アジトからの押取物の分析等により、確信を持って公式答弁しているはず。「いないからいない」との開き直りで納得する組合員など、役員以外にはいないはずだ。

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月19日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合) [No. 40]

革マル派の巧妙な浸透戦術に警戒しよう！

松崎氏や千葉氏らがいくら否定しようとも、これまでの検証で明らかにした状況証拠から、JR総連・東労組への革マル派の浸透は間違いないと確信するが、読者の方々はどうか判断されるだろうか。今後、松崎氏らが訴えている「JR革マル派43人リスト裁判」や「小説労働組合裁判」の審理が本格化する中で、さらに核心に迫る関係者の証言などが明らかにされるだろう。この裁判経過も注視し、しっかりと検証していきたい。

ところで、JR総連側が革マル派の浸透を否定する一方、革マル派は「九州労大量脱退事件」「坂入事件」に関して、機関紙「解放」の論文で「JR総連内の党員諸君は、いまこそ持てる力を存分に発揮して裏切り者四人組とこれに連なるすべての陰謀・策略分子をうち砕くために不退転の決意をもってたたかえ！」(No.29 参照)などと、JR総連内の革マル派党員に呼び掛ける形で、組織内の党員の存在を敢えて積極的に明らかにしてきた。

革マル派議長はJR労働運動の戦闘的・左翼的展開を訴える！

では、革マル派は党とJR総連との関係をどのようにみているのだろうか。黒田寛一に代わり革マル派議長に就いた植田琢磨氏の『「労組への介入」ではない！』なる論文（「解放」1608号、2000年2月28日）に、以下の興味深い記述がある。

このような危機的な事態を突破するためにこそ、既存の労働組合組織の外部につくりだされている革命党であるわが同盟は、あらゆる産別・労働組合の内部でたたかっている戦闘的労働者とともに、JR総連労働運動の組織的防衛のために奮闘してきたし、今後もまたそうである。そもそも、「JR総連＝革マル派」というキャンペーンは、警察権力やジャーナリズムやJR連合が流してきた神話でしかない。たとえ、JR総連というひとつの労働組合の内部で数千名のわが同盟員が活動していたとしても、この労働組合組織がただちに革命党組織であるとはいえないのであって、このことは自明のことがらである。労働組合組織と党組織とを二重うつつにし、かの神話をデッチあげている権力者とそれにつながるいっさいの徒輩の悪宣伝に抗して、革命的理論をもって武装し、今日の労働運動を戦闘的・左翼的に展開することこそが中心問題なのである。

常人には難解だが、「革マル派は労組外の革命党で、JR総連内に革マル派同盟員が多数活動していても、それは党組織ではない」との認識に立ち、労組内の同盟員が「JR総連＝革マル派」の「悪宣伝」に抗し、強固な革命的理論を身に付け、組合員を引き入れて戦闘的・左翼的な労働運動を展開することが中心課題だ、と訴えているものと読める。JR総連が革マル派との対立や無関係を装うのは、このような理屈に基づくのだろうか。

2006年5月の政府答弁書では、革マル派活動家は約5,400人、前述の綾瀬アジトの分析資料では、JR総連内の革マル派構成員は約600名とされている。上記論文は数千名とも述べている。綾瀬アジト摘発は1996年だが、現状はどうなのか。革マル派活動家の養成源とみられる「JR労研」の「結成アピール」(No.10)は、上記論文の訴えと一致点が多いと感じる。非公然性の極めて高い革マル派の巧妙な組織への浸透戦術に対しては、強い警戒心が必要だ。「革マル派は一人もいない」どころか、JR労働運動を戦闘的・左翼的に展開しようとする革マル派活動家が増殖している危険性は非常に高いとみななければならない！

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月24日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 41】

JR東日本の経営陣周辺で不気味な事件が発生！

前号では、革マル派がみる党とJR総連との関係について検証し、JR総連・東労組に彼らが相当浸透している危険性が非常に高いことを指摘した。今号では、革マル派の浸透を許してきたJR東日本の労政について検証したい。

JR東日本は、革マル派浸透問題についての見解表明を避けてきた。2000年11月、参議院交通情報通信委員会は、理事会の了承の下、会社代表者に参考人としての出席を要請したが、委員会の前日、「当社の労使関係については平和裏に話し合いによる問題解決を基本としており、また、一会社内の問題でありますので、出席については控えさせていただきたいと思います」との通知を送り、出席を断った。翌2001年6月7日の参議院国土交通委員会では、JR完全民営化に関する審議で当時の大塚社長が参考人として出席し、民主党山下八洲夫議員の質問に対して、以下の通り答弁している（表現は口語から文章調に変更）。

- ・ 東労組は会社の発展に協力してきていると、かつ順調な経営成績を上げる背景にこの安定した労使関係があると判断しており、労働組合としてとくに問題があるとは思っていない。
- ・ 私どもは1人1人の社員をきちっと個人把握をして、そして業務の運営に支障のないようにしていくことに努めている。当社には74,000人の社員がおり、いろいろな考え方の社員もいると思うが、問題はこうした業務の面で彼らが、あるいは社員がきちっと仕事をしていかないとか、大変な問題を起こすということになれば、これは放置できない問題であるが、そういった事象はない。
- ・ (JR東労組への革マル派の浸透が) 現実に会社の経営にどう影響を及ぼしてくるかということが大事であって、私どもは労働組合としてどういう行動をするか、そして会社の発展ということに向けてどういう対応をするかということが極めて重要であるということを申し上げている。

JR東日本の「事なかれ主義」が革マル浸透と職場荒廃の原因だ！

この答弁から、2001年当時の会社は、本音か建前かは別として、東労組との労使関係の安定を強調し、「革マル派浸透についての指摘は認識しているが、業務上での問題は発生していないのでとくに問題はない」との見解を表明していた。しかしこの時期は、浦和電車区事件や三鷹電車区事件など、東労組がJR東日本の職場で好き放題に振る舞い、集団による糾弾行為がエスカレートしていた頃と重なる。会社の「事なかれ主義」が、革マル派の浸透を許し、職場秩序の荒廃につながったことは明らかだ。

しかし会社幹部は、なぜ革マル派排除にかくも弱腰だったのか。西岡研介著「マンガローブ」には、JR東日本現役最高幹部のA氏の供述として、以下の記載がある(44ページ)。

A氏によると歴代のJR東日本経営陣の周りでは、不気味で陰湿極まりない事件がたびたび起きているという。「あるJR東日本取締役宅のプロパンガスのボンベの周りに、ある日、大量のマツチがばらまかれていました。また、同じ人物のお孫さんが赤ちゃんだったころ、何者かにさらわれ、近くの交通量の多い幹線道路の中央分離帯に置き去りにされていたこともありました。別の幹部宅には鶏の生首が送りつけられ、家族が精神的にまいってしまったという話も聞いています。同様の攻撃は、JR東海やJR西日本の経営陣にも向けられました。むしろそちらのほうが凄まじかったのですが、彼らは耐えて、革マル派と手を切ったのです」

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月26日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 42】

JR経営幹部は脅しに屈せず革マルを排除せよ！

西岡研介著「マングローブ」では、前号で紹介したプロパンガスの事件や赤ちゃんの置き去り事件について、「あるJR東日本取締役」とした被害者は元社長の松田昌士氏（現相談役）であると明かした。そして「松田さんは、これらの犯行を『革マル派の仕業』と思い込み、彼らに対する恐怖をますます募らせていったのです。そしてこの頃から松田さんは自ら、松崎やJR東労組に擦り寄っていったのです」とのJR東日本関係者の話を紹介している（154ページ）。松田氏は2008年11月、日経新聞「私の履歴書」に登場したが、29日の第28号で、組合問題を巡る家族への嫌がらせについて、以下の通り述べている。

国鉄時代、私は常に主力組合であった国鉄労働組合（国労）と真っ向から対峙した。分割・民営化の信念を掲げ、これを曲げることもなかった。当然、私への風当たりはきつくなり、それは家族にも及んでいた。-(中略)- 国鉄民営化への道筋がたったころからJR発足にかけては特にひどかった。当時住んでいた埼玉県与野の自宅ではプロパンガスの周辺に幾本ものマッチ棒がばらまかれていた。-(中略)- ある時、同居している長女の息子が極端に水を怖がることを知った。理由を尋ねると、近隣のプールで指導員とおぼしき人物に無理やり顔を水に押し付けられたという。孫にまでの陰気ないじめにはさすがに慄然とした。

松田氏は、さぞかし勇気を持ってこの事実を明かしたことと思う。このような卑劣極まりない蛮行は、絶対に許されることではない。

JR東日本松田相談役への嫌がらせの犯人は革マル派ではないのか？

ところで「私の履歴書」の文脈では、陰湿な嫌がらせの犯人は国労関係者であるかのように読める。一方「マングローブ」では、松田氏は「犯行を『革マル派の仕業』と思い込み」とある。同書には、さらに、1991年以降、JR総連が大分裂してJR連合が誕生する経過で、東労組松崎元会長がJR東海の葛西副社長（当時）に対し、91年7月のJR総連青年部の大会で、「言っておく。君と闘う。堂々と闘う。そして、必ず勝つ。そのことを今、宣言しておく」と宣戦布告し、その後、同氏の個人攻撃やJR東海批判を掲載した出所不明の「JR東海新聞」なる怪文書が大量に配布されたり、信州大の講演に招かれた同氏が学生風の男性3、4人から生卵やペンキを浴びせられるなど、奇怪な事件が連続して発生したことを紹介している（165ページ）。これらの経過から考えると、松田氏への陰湿な嫌がらせについても、革マル派の関与を疑わざるを得ない。同氏は革マル派への恐怖心から、敢えて事件は国労関係者らの仕業かのように記述したのではないか、とも思えてくる。

革マル派の仕業かどうかは別にしても、こうした家族も巻き込んだ陰湿な嫌がらせが経営陣に恐怖心を与え、労政転換の障害になってきたことは間違いない。このほかJR連合や国労などJR総連と対立する組織や、JR革マル問題を追及する作家などに対し、革マル派の非公然部隊は、家宅侵入や盗難、盗聴などの不法行為を働いてきた。この中には、逮捕された活動家もいる。組織に都合の悪い者に対し、本人や家族をいじめたり、弱みにつけ込んだりする卑劣な行為を絶対に許してはならない。JRからの革マル派の排除のために、脅しや嫌がらせに屈することなく、JR経営陣は毅然たる姿勢を貫いて欲しい。

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月31日発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 43】

JR東の革マル排除の秘密会議に大塚会長・清野社長も参加！

先のJR東日本大塚社長（当時）の国会答弁では、会社は革マル浸透問題に無関心かのようにみえるが、本音はどうか。JR東日本は東労組偏重の労政を続けてきたが、2002年11月に浦和電車区事件の加害者7名の東労組役員が逮捕されてから、労政にも変化が生まれたようだ。2007年8月には、一番の有罪判決を受け、社員籍のある6名全員を懲戒解雇した。これに対して、東労組松崎元会長は、会社の姿勢に怒りを露わにしている。前出「われらのインター」（Vol.13、2008年9月）に掲載された松崎氏の論文の一部を紹介する。

そして本紙11号および12号などにおいて開示されている文書、「あの連中にはアメ玉を喰わせ、時間をかけ、次第に牙がなくなるように対応し、ついには牙がなくなってしまう—というような遠大な計画がJR東日本の革マル派戦略だ」「松がやめれば、カクもたいしたことない。島田（嶋田）なら取り込める。その時は会社が前に出る。勝負するということだ—ここに明らかにされているシナリオも嶋田一味を勇気づけるものであったことは当然であろう。会社が勝負に出てきた。あえて仲間たちの生首をぶった切った。ここまでやりながら「会社の労務政策は変更しませんから」などという嘘八百が通じるとでも思っているのであろう。私の知るところでは、公刊されている出版物において明らかにされている、現大塚会長、現清野社長、野宮当時仙台支社総務部長、佐藤正男同勤労課長などの密談・謀議について、会社側からのしかるべき反論も弁明もなされていない。どこをもって「労政は変えませんか」などという甘ったれたことを言い通そうとするのかお伺いしたい。

会社の革マル排除戦略の存在が明らかに！激しく嘔みつく松崎氏！

「あの連中には…」の記述は、西岡研介著「マングローブ」の160ページにある。前後を加えて「野宮氏の元部下の証言」を紹介する。

「90年のことです。仙台のメロポリタンホテルに当時、人事部長だった大塚さんと、総務課長だった清野さん、野宮さんら人事・労務関係の幹部が極秘に集まり、今後のJR東労組対策について話し合ったことがありました。その席で大塚さんは『せめて仙台（支社）だけでも、われわれが望む（松崎に支配されない）労使関係を維持してほしい』と話していました。そして（組合から革マル派を排除した）JR東海やJR西日本の労政に触れ、『あのような単純な手法は少なくとも、JR東日本にとっては愚の骨頂だ。あの連中（革マル派）には…（上述）…革マル派戦術だ』と強調していました。清野さんは『社員教育をしっかりやれば（革マル派による支配は）、必ず防げる』と語っていました。極秘会議に出席していた若手幹部からは『いつこの異常な労使関係から抜け出せるんですか』との悲痛な声も出ていましたが、清野さんは『なんとか軟着陸をめざすしかない。時機を待つことだ』と答えるのが精一杯でした。大塚さんも清野さんも、少なくとも90年時点までは、松崎とベツタリと癒着した住田-松田体制の見直しを図らなければ、と真剣に考えていたのです」

なお、「松がやめれば…」の記述は、「財界展望」の1993年9月号に掲載された、当時、JR東日本幹部の話として出回った怪文書の一部。松崎氏が「マングローブ」の記述や怪文書にさえ激しく反応するのは、それが事実だとわかったからだ。2007年1月に東大社会科学研究所が発行した「佐藤正男 オーラルヒストリー」には、上記と同じ内容が記載されている。JR東日本が革マル排除の戦略を真剣に考えてきたことは間違いない！